



# 鶴彬没後75年、命日の9月14日を中心に

# 11としも高松歴史街道フェスティバル

新聞に日々掲載される時事川柳、毎年発表されるサラリーマン川柳、最近注目を集めているシルバー川柳や介護川柳、そして鶴彬らが追求した文学としての川柳など、「これは面白い」「笑わせるね」「泣かせるね」「全くその通りだ」と共感し、心を動かされたことがあると思います。そして「私もやってみようかな」「でも出来るかな」と不安があると思います。大丈夫です。作ってみましょう。

川柳は俳句と共に世界で一番短い「五七五」の詩です。でも、俳句のように「季語」や「文語体」などの制約がありません。川柳は見たこと、聞いたこと、感じたこと、考えたこと、言いたいことを普段使っている普通の言葉で「五七五」のリズムに乗せて表現する普段着の文芸です。その上、ペンと紙があればいつでもどこでも作れます。

「鶴彬を顕彰する会」では、鶴彬没後75年目の命日にあたる今年9月14日を中心に、第2回高松歴史街道フェスティバルを催し、そ

## 作ってみませんか

# 市民川柳を募集

鶴彬通信

はばたき

第12号  
2013年4月25日  
鶴彬を顕彰する会

もくじ

- ②～⑨面 福島文化講座「衝撃の川柳歌人〜鶴彬〜」Ⅱ
- ⑩面 映画「鶴彬…」を語る神山監督、券田和子さん
- ⑪～⑬面 「鶴彬川柳教室」小学生の感想文、作品
- ⑭～⑯面 「鶴彬論」秋月愛里沙さんの卒論最終回
- ⑰～⑱面 岩原茂明「鶴彬の句に学ぶ」

の1環として広くかほく市民から川柳作品を募集することになりました。優秀な作品はフェスティバル会場に、鶴彬の句と共に行灯で展示する予定です。

### ◆◆応募要領◆◆

- 【部門と課題】 一般の部の課題は、鶴彬が命を懸けて訴え続けた「平和」。小学生の部および中学生の部の課題は「母」「おかあさん」。いずれも1題につき2句以内です。
- 【応募資格】 かほく市民及びかほく市内に勤務する方。
- 【応募方法】 A4の紙に黒のボールペン書き、またはパソコンで、川柳作品を2句書き、住所・氏名(雅号・ペンネームの時は実名を別に書く)・年齢・性別・職業を明記してください。
- 小学生は、学校名・学年を必ず書いてください。
- フアックスでも応募できます。FAX(076)281・1201
- 【応募期間】 2013年7月1日～8月15日まで。
- 【応募先】 「鶴彬を顕彰する会」事務局(〒929-1215 かほく市高松キ5 小山広助宛)へ封書でお願いします。
- 【表彰】 一般の部、小・中学生の部とも、最優秀句1句、秀句2句、佳作3句、入選句10句。
- 【選考】 予備選をかほく市川柳協会・橋爪無声子会長が行い、本選は高松歴史街道フェスティバル実行委員会の合議で決定します。

NHK文化センター福島教室・特別講座

## 衝撃の川柳歌人 鶴彬

澤 正宏 福島大学名誉教授

## 第2回 プロレタリア川柳時代(上)

アメリカで鶴彬の研究をしている方もおられると聞いて、これは世界的になるのかなあという感じがしています。

参考図書として、岡田一杜・山田文子さんの『川柳人 鬼才 鶴彬の生涯』と田辺聖子さんの『道頓堀の雨に別れて以来なり』をあげます。田辺聖子が川柳を研究しているのは、岸本水府という大阪の川柳人に興味を持ったからです。それから地元・石川の深井一郎先生の『反戦 川柳作家 鶴彬』、これもなかなか資料的にいいと思いました。

講座の前に、今年(平成24年)11月中の印象深かった川柳を挙げておきます。「学者よりモグラに聞きたい活断層」(9日付朝日新聞、荒井幹雄)。いいですねえ。それから「名は規制、体は寄生の委員会」(同、朝日新聞、佐々木紀明)。うまいねえ。原子力規制委員会の委員長は福島市出身の人です。頑張ってほしい。

川柳はいま、一番ホットな時だと思う。ポプラ社のシルバーを対象にした川柳誌が大変面白かった。「誕生日ローソク吹いて立ちくらみ」(笑)。「LED使い切るまで無い命」(笑)。老人の気持ちがよく出てる。「恋かなと思っていたら不整脈」(爆笑)。うまいねえ。

え。

## ■昭和元年(17歳)■

今日は、昭和元年から赤化事件を起こした6年頃までを取り上げたい。鶴さんは釧路で田中五呂八が出していた川柳誌『氷原』に心酔して参加、生命主義という考え方に共鳴する。生命主義というのはもともと表現主義というものの考え方でヨーロッパで20世紀の最初に起きる。それは命を大切に、命の躍動を大切にするという考え方で、画家のムンクなんか表現主義の走りだった。日本では遅れて入ってきて大正時代を覆う芸術思想とか哲学の思想になり、鶴さんが心酔した。ところが森田一二が出てきて、鶴の考え方を変え、現実的な社会批判の川柳を鶴に教える。やがて鶴は大阪へ出て町工場の労働者となる。家庭の事情と鶴本人は言っているが、不況のために養子先の伯父さんの機屋が倒産したという事情もあった。当時の高松の産業としては瓦工場と織物工場があったが、高松の産業がダメになったことと、あと一つは地元での労働運動、政治活動で居づらくなったとも言われている。そこで、いとこの喜多市郎の所へ転がり込む。その時に森田一二の芸術批判、あるいは社会風刺の川柳にかぶれてしまう。

川柳を見てみましょう。

## ■草に寝る、草の青さに染む心

川柳じゃなにかもしれないが、啄木短歌の影響がある句。草の溢れる生命感(やはり生命主義)が内部に浸透していく句です。

## ■春を吸う白砂の歓喜に腹這いて

これも啄木調。裏日本の春到来の喜びを白砂に代替させて、ものとの交わり、草とか砂とかに句の焦点を合わせています。

地図描く刹那も怒濤岸を噛む 一瞬一瞬に

自然の厳しい営為を見て取る、神経の張りつめた生命主義の句。以上3句は生命主義の句で、この頃、鶴は虚無主義、空しさにとらわれていました。

## ■落葉の一転二転無我空無

なかなかうまい句だと思えます。まだ脱出できなかった虚無主義の名残があります。落葉の「一転」に「無我」を、「二転」に「空無」を畳み掛ける手法とリズムになっていて、外国語ではアリタラシオン、日本語では頭韻疊重法、頭にきた語を次に使って重ねてリズムを作るという方法 [riten niten mujga ku unu]。虚無を詠むに反して心地よい。

## ■人類史の頁めくって風窓に逃げ

「人類史」という重い言葉を、その書物をめくって窓に抜けていく風で軽く表現しています。当時のモダン詩からの影響があり、同じような後の句で、寺山修司に「ランボーを五行とびこす恋猫や」というのがあります。ランボーは二十歳で詩を捨てたが、詩をひよいと猫は飛び越えていく。鶴の句になんか似ています。

## ■角度を圧して樹が倒れる

倒木の幾何学的な表現にモダン詩からの影響があり、「角度を圧して」は秀逸。

## ■半球の闇を地球は持ち続け

構想が大きくて、地球は半分が「闇」だという表現に、意味の重層性をもくろんだような句です。

## ■レットルに街掩われて窒息せむ

大正から昭和にかけて現代都市が初めて出現。その都市に隙間のないほど宣伝の紙が貼られて息苦しさを感じたんでしょう。都市批判ですね。

## ■学びやに料理法のみ教えられ

あんまり鶴さんは教育批判はしてないけど、対象のさばき方だけ教える学校教育を批判しています。

神様よ今日の御飯が足りませぬ 宗教批判

にもなるような句。食とか飢えるという一番低い視点から神様に訴える形をとつています。神様に問う形はよくあり、太宰治も「神に問う信頼は罪なりや」なんて名文句を残しています。神様よ、自分は人を信じてても信じてても裏切られる…と。鶴の方がくだけていますね。

12月5日に大正天皇が亡くなって、26日を残して昭和元年になりました。

■昭和2年(18歳)■

昭和2年、虚無からの脱却、生命主義への脱却ということを一生命懸念に考えていて、『影像』という雑誌で、「今私の生命に灯がついた：虚無の憂いの眉がひらき、虚無の衣をすてた私の微笑みを見て下さい」と書いています。よっぽど生命主義の方へ動いたんでしょうね。

このころ一時帰郷。「大正川柳」が「川柳人」に改題されます。この「川柳人」の代表者が井上剣花坊。鶴は森田一二に伴われて2月ごろに、東京・馬橋の剣花坊を訪ねます。剣花坊は論争が好きな人で「けんか」とかけているんじゃないかと思えます。剣花坊は長州の人。福島県にとつては、「ちよつと：」と言う人がいるかも知れませんが、「王道はわれ等の理想である。われらの希望である」と言っています。天皇制崇拜者で会津なんかとは考えを異にしたけど、しかしこの人が面白いのは労働者の味方をする事。「われ等プロレタリアートは、故無くしてブルジョアジーの搾取を甘受すべきで無い。故無くして甘受せる権利をブルジョアジーに蹂躪せらるべきで無い」と。プロレタリア川柳を断らなかつたんです。だから鶴はここで生きられ



文化講座で鶴彬を語る澤名誉教授

た、ということになりません。そして彼は、大正末期から昭和にかけて、川柳の革新派に傾斜していった川柳作家です。鶴さんはこの人に可愛がられました。

た東京から高松に引き返す。養家との間の離籍問題のためと言われています。この頃初めて大阪へ出て、その文化に触れて詩を書いています。「大阪放浪詩抄」。まだ労働者という意識はない。「はじめて見た大阪」「くろろずんでゐた」とか。公害だらけだった。「生活に思索を奪はれた都会人種は／みな極端な唯物主義者です」。大阪の人は「銭や、銭や」と言つて、一日お金の話をしない日はない、というくらいだから。「失業は僕をニヒリストにしてしまった」。貧困による絶望です。

秋に上京して、井上剣花坊（奥さんは信子という）の家に1カ月ほど寄宿をする。その頃のはがきに出てくるが、「僕今日まで北國新聞社東京支店に勤めかけて居りましたが、（中略）新聞社をやめたのは、余の儀ではなく給料の問題からです。主任は横暴な男で…」。給料不払いということもされたようです。井上剣花坊は柳樽寺川柳会というのを主宰していて、「川柳人」に属することになる。

鳥三平というペンネームの中島国夫は、鶴の書体は剣花坊によく似ていると言っています。東京・江東区にお母さんが再婚した滝田さんという家があつて、その再縁先に寄宿します。

12月1日に出た『川柳人』に「僕らは何を為すべきや」という評論を書いて、ここで明確に階級意識、つまり自分は労働者だと、労働者の視点でものを考えるんだということを明確に打ち出すことになりました。

「僕らは何を為すべきや」というのはロシア革命を起こしたレーニンの書いた論文に同じタイトルのものがある。まねたんでしょう。よく読んでいたんでしょうね。

次に評論を見てみましょう。「二頭作家に就いて」（『日本川柳新聞』2号）という評論があつて、二つの傾向に股をかけている川柳人はダメだと、新しい傾向に手を出し、古い傾向にも手を出している作家がいる、と。二頭作家滅びよ！と激しく言っています。2月に出た『氷原』24号に「**理知の悟性的昇華**」というエッセイがあります。難しいことを言いますねえ。自分が理知主義から出発した欠点を持つと告白。それを反省し、悟性的に克服しなければいけないと言う。悟性って哲学用語で、ドイツ語では理性と悟性は違うと言われる。悟性というのは、鶴によれば理知主義でも感情というものがあるんだと、さらにそれに生命を加えないといけないという。科学でいくら生命を説明したって生命は科学を超えているんだという考えです。生命は科学を超えたものだから、そのことを念頭に、「科学的合理的な一元的観念の立場より」物事の根本は一つだという考えを持つてという訳です。悟性というのは、ドイツ語



では悟性と理性は分けられていて、悟性というのとは総合的な知力を言う。西洋哲学の古代からの概念で、感性、理性を超えた論理的な知力、総合的な知力をいう。日本の評論家でも昭和に入ると悟性という言葉をやたら使うようになり、小林秀雄という評論家もよく使っています。

一元的な立場を科学的、合理的にプロレタリアの考えに持つて来れば鶴は完全にプロレタリアの川柳人になる。鶴がこのころ作った川柳に「蟻つひに象牙の塔をくつがへし」というのがある。鶴さんは象牙の塔にいた訳ではないけれども、自分の理知主義を批判することも込めてこういう句を作っているんだと思います。蟻というのは働く人、労働者、それがやがて象牙の塔をひっくり返していくんだと言っています。それから「僕らは何を為すべきや」。最近の川柳は生命主義と森田一二のような社会主義の二つに分かれるんだと、どっちを取るかという「反資本主義的、社会主義的立場に立たざるを得ない」と言っている。なぜかというそれは「労働者の苦悩というのは社会から来るからだ」と。さらに「文芸を救いの文芸として認識する」とも言っています。そして最後に、人間の救いを川柳に求め、その立場を労働者の苦悩に当てていく、焦点化していく。フォーカスする。人間の救いを文学に求めてその立場を労働者の苦悩に焦点化する。確かに文学には救いがある。文学はいかに生きるかを追求するわけだから、当然救いはあるわけです。

この頃作られた川柳を見てみましょう。  
**人、街にうごめく蟻となる哀れ** 現代都市が誕生して、そこであくせく働く「蟻」としての人間に珍しく「感情」を流露する。感情

を吐き出ししている。地方から都市に出て街の人間をいっばい見ると、こういう詩をよく作る。中原中也も丸ビルからお昼になるとどーっと人が出てくるのを見て、「出てくるは、出てくるは」という詩を作っている。

**あな尊うと聖書を売れば明日のパン** 鶴は古い川柳を勉強して、批判して、いいテクニクは取るうじやないかと言っていて、芭蕉が仏様の光を「あな尊うと」といった句があるけれど、これをとっている。食うことが先決の庶民のことを詠んでいて、宗教や精神性を皮肉っている。

**働けど食えず盗んで縛られる** 労働者を内側から見ずに、外側から見ているという欠点はあるけれども、もちろんこれは啄木を意識した句です。「所懸命に働いても報いられず、生命を維持するために犯罪を犯すしかない」というのは、社会的には身勝手な理屈だが、「盗んで縛られる」者の立場から「働けど食えず」の状況に追い込まれる労働者の実態を風刺しているといえます。

**人肺を病む女工 故郷へ死に来る** これは冒頭の「人」の字がない方がリズムがいい。あえて「人」をつけることによって、調子が乱れてくる。そうするとどうなるか。「人肺を病む女工 故郷へ死に来る」と後半を一気に言った方が衝撃が伝わる。そういうごつごつしたフィードバックをわざと作っている。このモチーフはよく出てくる。鶴さんはよく使っている。七、七、五では説明的になる。五、五、九と一気に読んだ方がよいだろうという事です。

**内閣の替わる日種子をまきに梟(けり)** 現代に似て目まぐるしく交替する内閣と、種をまき気長に育てていく労働との対比が俳句的。

全然違うものをぶつけてしまふ、二物衝撃の方法。内閣が変わることを風刺している。謡曲では「けり」で終わるものが多いので「梟が付く」と言われました。もともとはガンカモ科の水鳥で、鶴さんは珍しく漢字を使っている。今はそんな漢字は使わないが、詠嘆ではないぞと言う意味でそういう古い語法を残しています。

**貧乏ふえて王様万歳!** これもまだ労働者を外側から見ているが、王制の形を借りた資本主義批判、貧乏の増加はもちろん、惨い搾取の結果を意味している。

**社会面見入る大臣と泥棒と** 新聞による社会の動向をよーく見て絶えず社会をコントロールしてやろうという大臣と、社会を裏側から見つて隙を狙う泥棒とでは対照的、コントラストがあることを風刺的に詠んでいる。これも面白い句です。

#### ■昭和3年(19歳)■

昭和3年以降、日本の革命運動はどんどん盛り上がっていく。この年、鶴はプロレタリア川柳を宣伝し大いに創作したが、2月に郷里高松に帰郷して「高松川柳会」を結成する。アジビラにも川柳を載せるようになる。彼は高松川柳会を「プロレタリア川柳研究会」と命名。3月には全国組織で、NAPというグループ、全日本無産者芸術連盟の結成があった。鶴はNAP高松支部を創設します。NAPについてよく見ておかないと、鶴さんのこれからの動向が浮足立ってしまうので、NAPのことをよく考えたいので鶴の動向を見た方がいいでしょう。

ナップは **Nippona** **Artista** **Proleta** **Obtatio** エスペラント語です。全日本無産者芸術団体協議会と訳し、昭和3年3月25日

の結成で綱領が3つある。今でいうとマニフェストで、①プロレタリア芸術の組織的生産と統一的発表。つまり生産と発表。統一的な発表をするには雑誌がいる。それで機関紙『戦旗』というのを作る。②ブルジョア芸術の現実的な克服。ブルジョア芸術を超えようというマニフェスト。③専制的な暴圧に反対しようというもの。『戦旗』は創刊号が7000部も売れた。最盛期の昭和5年7月には2万3000部が出ている。昭和6年12月にはダメになるが、この間には相次ぐ発禁がありました。

このNAPは日本プロレタリア芸術運動の中心になり、その最盛期を作り出した。結成当時から文学をリードするための指導をするが、ポイントが二つあります。一つはプロレタリア・リアリズムの問題。ソ連から帰ってきたばかりの蔵原惟人が提唱したもので、労働者の小説の方法、今でも残っている名作がたくさん生まれる。きちんと現実を見て、きちんと人間の営み、労働を書こうじゃないかと。たとえば今、高校の教科書に載っている葉山嘉樹の「セメント樽の中の手紙」なんかは高校生がみんな読んでいます。

もう一つは「芸術大衆化論争」。これが難しい。簡単に言うと、蔵原のように『戦旗』を使って革命運動、革命芸術のための機関紙にして、川柳だろうが文学だろうが、芸術を手段にしようということを彼は訴えるわけです。やがてこれの偏重となり、芸術は手段でいいんだと、アジビラ文学なんて言われることもあった。だが、芸術の独自性、文学性というものがあるから文学性を大切にしなければ芸術ではないんだという考え方も出た。これに近いのが中野重治という作家。福井の人だ

が、中野は「芸術に政治的な価値はない」とはっきり言う。いいことを言う。革命運動しているときにそういう。そして「芸術の仕事はプロレタリアの政治闘争の中にある」と。微妙に違うが、こういう論争、中野・蔵原論争がありました。

こういうのを経て昭和5年5月、次のような決議がされる。これが日本の文学運動を大きく変えていくことになる。①芸術内容は革命的プロレタリアートのイデオロギーである(イデオロギーとは考え方、観念形態と訳す)、革命をめざす労働者の考え方であつて、それ以上でも以下でもない、妥協は許されないということ、芸術が手段化されることにもなる。革命をめざす労働者の考え方がないとそれは芸術ではない、ということになり、政治的偏重、偏向が危惧される。②「芸術の受容者は重要産業、大工場の労働者、貧農」と。貧農を入れているところはいいと思う。芸術を受け取るものはみんな労働者なんだ、ということ。だから労働者の革命を狙っているわけです。これら労働者とか貧農を組織するのは革命的な労働者、革命的プロレタリアートだと。そしてこれらの芸術運動は大多数でやろう、たくさんの方がやろう、ということ、当時のロシアの言葉をとって来てボルシェヴィキ(多数派、過激派)化の方針、ソ連の考え方を受けるのに綱領とか決議に盛り込んだ。国家主義の立場に立って政治的に労働者を取り仕切るのがボルシェヴィキだが、そういう綱領とか決議を出したのがNAPです。

さて、鶴さんは『戦旗』を毎号読んでいたようで、NAPの動きは知っていた。日本で一番大きな弾圧と言われる昭和3年3月15日

の「三・一五事件」と呼ばれる労働者組織への大弾圧が起きる。多くのプロレタリア作家はこれを小説に描いている。小林多喜二も「二九二八・三・一五」というタイトルもそのものずばりの小説を書いている。昭和史上、最も残酷な大弾圧で、1600人以上が治安維持法違反の嫌疑で検挙され、鶴も結局は後にこの治安維持法で殺されることになる。

3月31日には川柳作家6人が集まって理論武装をしようと、理論武装と作句をする(6人は喜多一二、森田一二、福村無一路、金谷喜八、油井由太郎、岡田ノボル)。理論は、  
 〔川柳を抑圧されている大衆、あるいは飢えを何とかしようとする簡明で鋭い暴露的な短詩として広げよう〕ということを宣言している。他にも「諸君らの血みどろなる内生命の武器的表現たらしめん」と言つて、心の底から、内面から湧き出てくる気持ちを詠う、吐くことによつて表現しようということ、を言っている。

ところが、案の定、高松の川柳会が弾圧を食らう。鶴ら4人が検束。鶴さんはこの時初めて捕まることになる。5月には『戦旗』の創刊号に鶴の川柳も掲載される。すごいね。地方にいる鶴さんの句が掲載されることはすごい事です。

彼は、山下秀というペンネームを使っていたけど、その名前を川柳人が明かしちゃった。それでまた捕まっちゃまずいということで、考えたのが「鶴彬」。どうしてこんな名前を付けたのかわからないが、一つの説としては、井上剣花坊と信子さんの間にはお嬢さん、鶴子さんがいてその人が好きだったから「鶴」とつけたんじゃないかというんだけど



も、決め手はない。あからさまにつけるものかな、とも思うが、「彬」はいろどりがあでやかな姿、外側と内実が並んで備わっていて鮮明であるという意味。「鶴」が鶴子さんからでないとしたら、「つる」の語の由来は「つるむ」「一緒になる」「連れ」という意味があつて、労働者と一緒になろうと言っていた人だから、仲間を作るといふことも含めているのかな、とも思う。

昭和3年の終わりになると、「氷原」から掲載を断られる。この頃のことについて、小田無限さんという人が思い出を書いていて、鶴さんの風貌は「都会的に洗練された、背のすらりとした色白の眼差しで、清らかで明朗な印象の大人びた風貌が記憶に残っています」と言っている（昭和47年10月発行『川柳人』488号、「鶴彬の思い出」より）。

さて、昭和3年の評論を見てみましょう。

「宮島氏の思想について」（昭和3年2月『氷原』26号）で、「僕らはいずれこへ行くか、共産主義的無政府主義へ」と言っている。共産主義をねらうのはわかるが、無政府主義を強調、力点が無政府主義にあるのが特徴です。

川柳については、「川柳の発生の意義と新興川柳の方向転換」（昭和3年5月1日『川柳人』187号）で、新しい方向を取るべき川柳を述べていて、新興川柳の生命主義はもはや御伽噺だとして、「来るべき新時代を創造するものは実にこのプロレタリア階級であるから」「無産階級の無神論の樹立を」と言う。ここでも無産階級よりも無神論を強調している。あらゆる権威、権力を嫌う特色がここに出ているのじゃないか、と思う。労働者を中心とする自由解放の社会をめざしていたことは確かかなようです。あんまり共産主義と

か社会主義とか綱領とかにこだわるようなものじゃなくて、権威、権力を嫌う、労働者が中心となった自由解放の社会を考えていたのではないかがえます。

「生命派の陣営に与ふ」（昭和3年5月10日『氷原』29号）で、「搾取なき社会建設に到達する要素として芸術の政治的闘争的役割を自覚しプロレタリアートにアツピールする」という文脈には川柳を手段にするという、いつてみればNAPの持っていた欠点、芸術を革命の道具にするという傾向を少し見せるようになる。もちろんマルクス主義の理論では、革命が終われば芸術の手段化はなしにするという、革命の過渡期には芸術を手段化するという考え方です。「プロレタリア川柳の美的見地」（昭和3年7月1日『川柳人』189号）では、「我々のプロレタリア川柳は、内、生命の階級闘争的感情の表現管であると同時に（中略）街頭一句の宣伝的武器的芸術として、我々同志に浸潤し、潜入して行く」と述べており、「感情」を捨てないところがいい。かつての生命主義が生きていると思う。「プロレタリア川柳批評への批評的走り書き」（昭和3年7月10日『影像』47号）では、過激だけでも、戦闘的で無神論的な「擲弾詩」（なげうつ詩）、それが川柳だと言っています。「『的走り書き』という言い方は、中野重治のエッセイをまねている。また、川柳は「被抑圧民衆の創造短詩として発生したる民衆芸術」「階級闘争の武器」であるとし、川柳を明確に運動への手段としている。NAPの方式の影響が出ています。鶴さんが独自に言っていることではなくて、NAPの影響です。それから「この稿を最後に喜多一二の名を抹殺する」とも言っている。

「全国新興川柳詩人に与ふ」（昭和3年11月20日『川柳千舟』17号）では「プロレタリア川柳とは無産階級の短詩」と、労働者の詩だと言っている。「とり残された問題の走り書き的解決」（昭和3年12月1日『川柳人』194号）では芸術にも階級闘争があるんだと主張。プロレタリアの芸術なんだから芸術にも階級闘争があるのは当然です。そして「プロレ文化へ」（昭和3年12月30日『氷原』36号）のエッセイでは、「今後の新興川柳はプロレタリア川柳でなければならぬ」と、彼にとつては当たり前ですけどそう言っている。以上見てきたように、必ずしもNAPの方針そのものではないけれども、NAPに沿ったような芸術論、芸術を政治の手段にしようとする傾向が見えています。

このころ作られた川柳を見てみましょう。  
**聖者入る深山（に）ありき「所有権」** 社会の現実や経済から超越しているかに見える深山に入る聖者でも、所有権から逃れられないこと。マルクス経済学が重視する所有権の問題です。マルクスの「経済学哲学手稿」によると、地方の放つてある山でも所有権はあり、山は「不完全な資本」でこれから資本になるものとして重視されています。

**夕方電車弁当殻のシンフォニー** すっかり空になった弁当箱が、夕方の電車内で交響しているという情景をユーモラスに詠む。労働者が疲れて電車に揺られている情景も浮かびます。

**ロボットを殖やし全部を誅首する** ロボットは資本家のいいなりです。人間のロボットかも知れない。ガレル・チャペックという人がロボットを登場させるお話を書いているが、それを思い出します。

**文明とは何骸骨のピラミッド** 「文明」ときれいなことを言ったって、所詮は王様の墓じやないかと、ピラミッド造りに従事した人間のことを思つての権力への皮肉、風刺です。**奴隷ども集め兵器をこさえさせ** 権力によつて「奴隷」状態の人に人を殺す武器を作らせる、そういう者への皮肉。現在の労働者も奴隷状態です。

**軍神の像の真下の失業者** これは「屍のゐないニュース映画で勇ましい」の句と似ています。隠しているものを暴くスタイル。自分のことも含んで、勇ましい戦争の神(将軍、大将など)の像の下では、不況による失業者があふれているという深刻な実態を、矛盾の様相としてを詠んだ風刺柳川。

**毒瓦斯が霽れて占領地の屍** 戦地での残酷な情景、特に侵略による他国人の毒瓦斯による死を直接に詠んでいる。旧日本軍の石井部隊は毒瓦斯を使っていましたね。イペリット(瓦斯)なんかも使っていた。今でも瀬戸内海の広島県大久野島(資料館あり)の毒瓦斯を作っていたところへ行くと、岩は毒で真っ黒です。

### ■昭和4年(20歳)■

昭和4年には、井上剣花坊が『川柳人』(195号〜199号)に天皇絶対主義の論文「川柳王道論」を1月から4月にわたって書く。このころ鶴さんは「就職難と闘って疲れきつてゐます」(渡辺尺蠖宛て)、「全く悲惨さにあまって、涙も出ません。二三日後僕は、支那労働者の群れに入つて、しばらくは飢えを凌ごうと思つてゐます」(同)と書き送っている。「支那労働者」というのは最低の条件だった。鶴は前科があるのでなかなか雇ってもらえない。「肉体が続くか、どう

か?は、やってみなくては分かりません」(同)。就職難は、鶴の前科と特高の監視も影響した。

3月に、いままで治安維持法で捕まつても懲役10年で済んだのに死刑が加わつた。ひどいでしよう。これに猛反対した政治家・山本宣治(山宣)が右翼の青年に殺される。軍部が殺させた。この頃、鶴さんは文化活動もやっていた。図書館作りや村祭りのカベ川柳の貼り出しとか。しかし、鶴さんは剣花坊と座談会に出てますます過激になる。「労働者大衆の中へ突き進み、生々しき姿があるがまさに描き出さねばなりません」(同)。鶴のいいところは、観念的ではなく具体的に書くことで、現場の労働者を具体的に書くということ、言葉が具体的というのがいい。

またこの頃『三味線草』という、後に川柳人を警察に売つてしまった大阪の川柳誌が6月に創刊される。主宰は森鷗牛子。また、弾圧に耐えきれず、合法政党として新労働党が結成される。合法政党と言っても軍部が許す政党で、委員長は「輝ける委員長」と言われた大山郁夫。ちつとも輝いていない。こういう状況に対する鶴さんの川柳も残っている。『川柳人』の記念号となる200号で、「寿命だと云つて手当てをくれぬなり」。どうせ死ぬのだから給料はいいだらうと。ひどいですねえ。

評論を見てみましょう。

『柳壇時評的漫筆』(昭和4年1月3日『影像』51号)で、「吾々に盾つくものは、せめてのことに、戦旗の一冊くらい読んできてくれなくては困る」と書いており、鶴が熱心な『戦旗』読者でプロ文を勉強していたことが分かる。「失はれたる写実主義の揚棄」(昭和

4年3月1日『川柳人』197号)ですが、「揚棄」というのは相反するものをうまく統合して次のより高いレベルに行くこと。労働者の姿をより生き生きと描くために過去の川柳が持っていた技術、それを鶴は写真主義的技術と言ひ、それを批判しながら、その中から必要なテクニクを揚棄する、一段高いところへ釣りあげて行かなければならないとする。つまり古きに学ぶ態度、いつてみれば内在批判、内側に入つてそこからもらつてくる。例としては「役人の子はにぎにぎをよく覚え」。公務員の子は儉約を覚える。これは日常生活の諧謔的穿ち、批判精神だと言う。しかし暴露しているだけじゃないか、暴露だけではだめだと。最終的には労働者階級の写実主義、リアリズムまで持つて行かなければならないと言っている。同様の例として「病める失業の姿」を出し、資本主義の非人間性、あるいは矛盾というものを踏まえたところで書かないと、単に失業者がいるということになつてしまふ、それだけではだめだと、そこにそういう視点を入れると言います。これが「資本主義組上に引き裂かれたる姿」と彼は言う。要するに明確な労働者意識を持つてリアリズムの川柳を書け、ということ。これはなかなかまともな意見です。そして「芸術とは、常に階級的イデオロギイの表現であり、宣伝であり」とはつきり言っている。やはり、手段化しようという考え方はNAPを通じてのものです。「プロレタリア川柳運動と『川柳人』との問題」(昭和4年7月1日『川柳人』201号)では、剣花坊を鶴は擁護する。剣花坊の『川柳人』がプロレタリア川柳の機関誌になつたという批評に対し、鶴は弁護します。いやいや剣花坊は



「日本主義的王道論、つまり天皇制絶対バンザイ、そういう論理によってマルクス主義的唯物論を超えようとしたんだ」と。鶴さん、苦しかったかも知れないけど世話になった人だし、剣花坊は魅力のある人だった。天皇制絶対主義を言いながらプロレタリアを擁護するんだから、剣花坊なかなかの人です。共通するのは今まで鶴が超えてきた、神秘主義だとか生命主義だとか、つまり超階級の神秘主義の否定であって、剣花坊とは一致する。

川柳を見てみましょう。

**十五日経ったら死ぬと言う手当** 労働に對する手当が不当であることを、半月しか生きられないという具体性で表現している。労働者の側に立っている。十五日と言う具体性がある。

**血を啜りて坑しきをあげれば首を蹴り** 鉱山労働者が置かれている非人間的で過酷な労働の実態を、血を吐いたうえにクビにされるという実態で表している。次元は違うが、放射能浴びて血を吐いて、ピンはねされて死んでゆくという状況に酷似です。

**つけ込んで小作の娘買いに来る** 鶴にこんなことが本当にあったのかと問うた人がいたそうだが、私も実際に義母に聞いたことがあり、当時の日本の農村であった出来事に取材している。

**全集全集幾百万の羊の死** 立派な全集が出るけれどもみんな羊の皮でカバールをしていて、そういう指摘です。ブルジョア階級の著述家へ向けられた批判。

**しもやけのクリーム買って飯を抜き** 飯を抜くほどの労働の過酷さをしもやけで表現。

**ポンチ画になってブルジョア残される** 明治に来日したビゴーが描いたポンチ絵、風刺

画があります。ブルジョアはポンチ絵で風刺される格好の存在だったと言っている。

**出征のあとに食えない老夫婦** 日本の小説（悲惨小説といった）では、日清戦争が終わった直後に出征した後の壊れていく家族が初めて取り上げられた。松川事件で有名な広津和夫さんのお父さん（柳浪）がこういう傾向の小説を書いて、明治文壇で有名になった。「食えない老夫婦」と言う具体性に高い批判性が認められる。

**生きるため葬儀会社のストライキ** 死者を送る葬儀会社でさえ、生きるためにストライキをせざるを得ないという、低賃金労働者の実態へ向けられた眼が冴えている。

**弾圧の斧がとどかぬ地下組織** 地下組織へもぐった小林多喜二も虐殺されたことを考えれば、「斧」がとどかないとは安心できないが、運動を断ち切る重く鋭い「斧」でも、とする点には官憲への挑戦意識もある。

#### ■昭和5年(21歳)■

岸本水府が『国民川柳会報』を出す。政府に認められる川柳だから、柔らかな川柳です。岸本水府は「番傘」の主幹でもあったが、戦時下での川柳誌の統合で残存誌の指令を受ける。「お前たちの川柳は残っていない」と。つまりキバを抜かれるわけです。批判性がなくなつたと言える。彼の考え方には、川柳への愛があつて、「番傘」を和の心で掩いたというもので、川柳作家同士が懇親を結び、宥和親睦の気分を社会に広げて川柳をPRしようとしたのです。水府の長年の悲願は川柳が文壇に進出することだった。そして正当な評価を得ることだった。余談ですが、福島県に川柳をもたらしただ大きな存在として、白河出身の大谷五花村、近藤鮎子坊の二人がいま

す。特に大谷五花村さんは剣花坊の柳樽寺の同人で、福島に川柳を根付かせた人でもあり、『東北川柳』を昭和の初めに出して、自分のことを「川柳界のラップ手」と称していた。句碑があります。「白河を名どころにして関の跡」白河を有名にしたのは白河の関だ、という意味です。

昭和5年、鶴はいよいよ軍隊に入る。1月10日、郷里を出て第七連隊に甲種合格。第九中隊に所属。それは加賀百万石の本城・金沢城跡にあつた。入隊に際してお父さんが紋付、羽織袴をはいて行けと言ったそうだが、鶴は「天皇陛下は貧乏人に無理してまで着て来いとは言われない」と言つて、木綿の紺緋で行つたというエピソードが伝えられています。彼は一等兵になり、上等兵候補にもなつて「なぐらない同盟」をつくる。2月にはナツプの機関紙『戦旗』が発禁処分になる。3月の陸軍記念日で連隊長が軍人勅諭を奉読するが、その最中に鶴さんが「連隊長殿、質問があります！」と言つて出てきた。新兵が連隊長に直接話をするのは出来ないし、勅諭を中止することは天皇をバカにすることだから、中隊長は3人も更迭された。彼は重営倉行き。見事なもんです、痛快ですね。そして、ちよつと油断してたのかな、外部の労働者・角田通信と連絡を取つていて、『無産青年』が発見され隊内衛戍拘禁所（拘置所）に入れられ二等兵に格下げとなる。手箱には「労働者農民政府樹立万才」などの言葉が残されていました。実弟の喜多一二三の証言によれば、鶴の親類の成瀬咲枝が差し入れた『労働新聞』が見つけられたとも言われています。これを「第七連隊赤化事件」と言います。この年12月25日の『北國新聞』による



と、日本労働組合全国協議会（全協）石川支部キヤップの蓮村時男が東京で逮捕され、赤化事件を仄めかす。翌年2月21日の「北國新聞」は蓮村時男と小島源作（ナツプの石川支部書記長／名古屋新聞金沢支局記者）が赤化事件に関係しているらしいと報じ、喜多一二と角田通信（共に第七連隊の二等兵）は起訴される。蓮村と小島は軍人ではなかったため起訴は免れる。さらに角田は転向、鶴さんだけがしよっ引かれひどい目に遭うことになる。

昭和5年の川柳を見てみましょう。

三・一五のうらみに涸れた乳をのみ 低賃金労働と大弾圧とのなかで涸れた母乳を飲む幼児（もともとも弱い存在）に深く心を寄せている句。

勲章やレールでふ腹くれたドテツ腹 勲章と言うのは戦功。レールは侵略のシンボルです。戦功、侵略というように軽蔑する表現と、ドテツ腹との組み合わせが効いている。



だと思ふ（挿絵を参照）。

主人なき誉の家にくもが巢を 先の「出征のあとに食えない老夫婦」に似ている状況です。戦争で主人を失った家は滅びるだけであるというむなしさを蜘蛛の巣で表現している。「誉の家」はそう思い込まされている家の人々と、そう思い込まず国家の側との両方に皮肉の眼は向けられている。

ゼネストだ花が咲こうが咲くまいがよ ま

ともな、まじめなプロレタリア作家ならこんなことは書かない。アナキーだ。でもこういうのを書くのが鶴さんだ。成功しようがしまいが、とに角ゼネストだという底辺労働者の心情をよく掬い取っている。上からの指導者の視線ではない大衆性がある。

か これもアナキーな心情が出ています。当時のまじめな運動家からは怒られるだろうけど。

手と足を大陸におき凱旋し

これは前回読んだ川柳の最初の形みたいなもの。「手と足」双方の戦争における役割が不分明で、「手と足」の並列では批判が焦点化しない。また、「凱旋」も批判性が見え透いていて、「手と足」の戦争における役割とうまく呼応するかどうかわからない。「万歳と…」の方がやはり見事だ。

昭和6年(22歳)

さて、鶴は軍法会議にかけられる。軍法会議は1日目は朝9時から夜の7時まで。構成は裁判官、法務官係り（本件のために名古屋から赴任）、検察官、参謀長、旅団長、司令部付き少将、連帯区司令官など。一般傍聴人には師団・憲兵隊関係者、労働組合有志などだけ、途中で「関係のない人は出てください」と一般傍聴者は出されて、養父の喜多喜太郎だけが許された。喜多、角田への尋問、弁護士の意見陳述があつて閉廷。エピソードでは、学歴を問われ「小学校卒」と答えると、「嘘をつけ」と法務官に怒られたり、第二インターナショナル、つまり世界の革命の綱領を言えと言われて、一言も漏らさず空で言ったという。法務官がびっくりして「本当に小学校卒か」と。大西巨人の小説『神聖喜

劇』の記憶力抜群の天才的主人公に似ています。鶴は「私の主張は、天皇陛下の大御稜威（おおみいつ）、換言すると、文化を下方に遍く潤すことにある。しかるに天皇の袖に隠れて、軍、財、政党が、天日の下、暗雲の如く遮っている。自分はこの雲を払おうとするのである」と言い、弁護人は続けて、「被告の如き忠君愛国の軍人をたがが罰せられようぞ」と弁護したそうです。痛快ですなえ。

2日目は8時半から開かれて喜多（鶴）さんは懲役2年6カ月が求刑される。6月13日に判決が下って懲役2年。判決理由（罪状）は「軍隊ハ天皇ガ統率シテイルノニ、ナンデ資本家ヤ地主ノ利益ヲ図ツテ道具ニシテイルンダ」とか、「無産階級出身ノ兵卒ガ階級意識トカ反軍思想ヲ広メヨウトシテイルノカ」とか、「自分ハ日本共産党及ビ日本共産青年同盟ガ拡大強化スルハ良イト思ツテイタ」ということにあり、治安維持法違反、大阪衛成監獄送りが決定。随分虐待を受けたといえます。身体を壊し、健康を害し、殴打、寒中水風呂なんかがあつたようです。『世界』という雑誌に証言が載せられていて（1977年8月号、友人・前田慶穂の証言）、「除隊当時、ひどく身体をこわしていた形跡もある」とあります。友だちだった秋山清、この人は戦時下で抵抗した数少ない詩人のひとりですが、「とつぜんからだ痛み、ぶつたおれた彼の全身に紫色の塊が盛り上がるという奇怪な持病の主となっていた」（秋山清『近代の漂白』、1970年）と証言しています。そして角田通信は転んでしまふ。

以上が第2回の講座です。次回の第3回（最終回）は鶴彬の晩年となる川柳、評論を話します。

## 私も一言



映画「鶴彬」の軌跡」監督  
神山 征二郎

## 時の官憲に暴力の限りを尽くさせた

治安維持法は史上最悪極悪の法律だったというところが川柳作家鶴彬の映画を作ってみてよく解った。

恥も外聞もなくそんな法律をこしらえた裏にはよくよく後ろめたい事情を国家権力がかかえていたということだ。正義にもとる、世界に顔向けの出来ない破廉恥行為を強引に遂行するには、それに逆らう者の口を封ずるほかに手立てなし、と時の官憲に暴力の限りを尽くさせたのが祖父の時代の日本の姿だった。映画づくりを進めながら無性に恥ずかしくなった。他所の国ではなく自分の国のことだからである。

中国を制覇し、米英も叩きつぶし、世界の王者になろうなどと企てたのだから、半端なことではすむはずもなく、一介の詩人ごとき「軍隊はブルジョアの利益のための道具にほかならない！」と凶星されては面子丸つぶれだから殴る蹴る、果ては殺す。そうゆう時代を描きながら、何か笑えない喜劇を見ている気分させられた。

(治安維持法犠牲者国家賠償要求同盟機関誌「不屈」2013・2・15発行、464号より転載)

## 「鶴彬」天にはばたけ!

## 「鶴彬」の軌跡

石川民医労書記 券田 和子

平和と平等を願って短くも熱く

青春を生き抜いた愛しい青年

「可憐なる母は私を生みました」「暴風と海との恋をみましたか」「都会から帰る女工と見れば病む」「高く積む資本に迫る蟻となれ」「万歳とあげて行った手を大陸へおいて来た」「胎内の動き知るころ骨がつき」「ヨボと辱められて怒りこみ上げる朝鮮語となる」「貧乏ふえて王様万歳」「枯れ芝よ! 団結をして春を待つ」「暁をいだいて闇にいる蕾」

数年前に能登の青年が綴った古い1冊の詩集を手にした。一途な青年の群像が全編に息づき、強く惹かれた。その中に喜多一二(本名・きたかつじ)が「同志」として登場し、私は「鶴彬」と出会った。この映画は2009年、川柳作家・鶴彬の生誕百年記念として作られたドラマ仕立てのドキュメンタリーである。彼を愛してやまない地元の人々(石川県かほく市高松)の熱意と善意は名匠・神山征二郎監督(「遠き落日」「月光の夏」「大河の一滴」など大作多し)の心を動かした。出演者には新鋭池上リヨマとベテラン俳優陣(樫山文枝、高橋長英ら)を迎え、地元エキストラが手弁当で集まり共演した。

喜多一二が生まれた1909年、朝鮮ハルビンで伊藤博文が暗殺された。軍靴の響きが忍び寄っていた。8歳で父が死亡、母の再婚で伯父の養子となり幼少期を過ごし、優秀な

成績であったが進学希望は叶えられず、養父が経営する織物工場で働きながら地元紙に川柳を投稿。文学青年たちと親交を深め、川柳界の大御所・井上剣花坊にも認められる。時は大逆事件、関東大震災、治安維持法公布と暗闇に入り込んでいった。

織物工場が倒産、学歴もない田舎者に現実には厳しく18歳の一二は社会の矛盾と失意の中上京し母との再会を果たす。また師となる井上剣花坊、信子夫婦を訪ね「僕らは何を為すべきや」を発表し作句態度は鮮明になる。石川へ帰り「高松プロレタリア川柳会」を発会、治安維持法で警察の取り調べを受け「川柳はあくまで詩だ、文学だ」と抵抗するが、特高につきまとわれ再び上京。ペンネームを「鶴彬」とし、文学としての川柳の評価を高め、「魂の詩人」たる多くの作品を発表し続ける。21歳で金沢歩兵七連隊に入営中、投獄され「軍隊はブルジョアの利益のための道具に他ならない」と憲兵にせまるなど反軍の精神を貫き、除隊後川柳活動を再燃。剣花坊の逝去を悼み泣きながら「ああ良心よ、良心よ!」と自由詩を詠じる場面は感動的である。28歳、治安維持法違反で特高により検挙される。

たぐいまれな才能を持ち平和と平等を願った青年は、恋を語り理想を求め、理不尽に憤り自らを偽らず、青春を真っ直ぐにかけぬけ、尊敬する井上信子に看取られて天に昇った。29歳の若さだった。「休めない月経痛で不妊症」「月経がくるってしまふ深夜業」などは現在の看護、介護現場での悲鳴にも聞こえる。悪法・治安維持法は多くの才能を抹殺した。二度とあつてはならない!。

(「医療労働」誌2012年12月号より転載)

# 鶴彬の授業に学ぶ

岩手県盛岡市の市立玉山小学校から、元小学校長・宇部功さんによる「鶴彬川柳教室」の授業を受けた5、6年生の感想文が送られてきました。また、同校の校長先生から、鶴彬の句入り手作りティッシュ入れを贈った城戸寿子さん（鶴彬の姪）への礼状も届き、合わせてご紹介します。

## 昭和の歴史学び、理解深める

玉山小学校校長・谷地畝 稔視

（略） 過日開催いたしました川柳教室に際しましては、鶴彬様の信念を貫き通した生き方と作品について、そして、玉山出身の石川啄木とのつながりについて宇部功先生に授業をしていただきました。

この授業を通して、5、6年生の児童たちも、子どもたちなりに平和について、考えたり、言葉の力の大きさ、強さについて感じたりすることができました。昨年度5年生でこの授業を受けた子どもたちは、今年度6年生となり、昭和の歴史を学習し、昨年以上に授業内容について、理解を深めた様子でした。

鶴彬様の一つひとつの作品の込められた思い、平和の実現、人間愛について、子どもたちなりに理解し、現在の平和に対しての感謝の思いを新たにすることができました。

また、貴台お手製のティッシュ入れを今年度も頂戴いたしました。お礼申し上げます。子どもたちは、中の一句一句に目をやり、友達同士見合って、たいそう喜んでおりました。

た。大切に使用させていただきます。（後略）

## ●ざんこくだった戦争の時代

盛岡市立玉山小六年 伊藤 梨桜

今日の川柳教室の話で出てきた、鶴彬は、「手と足をもいだ丸太にしてかへし」という作品を作った人物だと宇部先生から聞いて私は、戦争の時代はとでもざんこくな時代なんだなあと思いました。

おどろいたところは、鶴彬の墓が盛岡市にあることを知ったことです。鶴彬の墓は石川県にあると私は思ったのですが一叩人により見つかりました。

もう一つおどろいたことがあります。それは、鶴彬は石川啄木のファンだったことが、あと一つのおどろきです。鶴彬はそれがきっかけで川柳を作ったと宇部先生から聞きました。

川柳は、楽しんだり、自分をふり返ったりするものだと思いますが、鶴彬の川柳を見て、こういう使い方もあるものなんだなと感じました。

## ●自分の命をけずってまでも

玉山小六年 工藤 直人

今日の授業はやってよかったと思います。理由は、宇部先生は「復習だね」と言っていたけどぼくはあんまり覚えていなかったのだから改めて勉強できてよかったです。勉強してみ

て鶴彬（喜多一二）との関連人物におどろきました。まさか「石川啄木」と「田中正造」がかかわっているなんて思いました。社会で今年歴史を勉強して、去年以上に理解できました。鶴彬の作った作品は、初めは意味が分からなかったけど、話を聞いてとても悲しい作品だなと思いました。戦争について、ぼくは残酷だなと思いました。そして、鶴彬の

川柳に対しての思いを自分の命をけずってまでもこの思いを伝えたかったんだなと思いました。

## ●啄木のファンだったとは…

玉山小六年 小林 蓮

今日の川柳教室では、二つのことが分かりました。一つめは鶴彬さんという人の、「手と足をもいだ丸太にしてかへし」という川柳が実は戦争のことをさしていたということ

です。宇部先生は、とても親切にこの川柳の意味を教えてくださいました。手と足をもがれるなんて、想像したくないくらいでした。しかし、これを裏がえせば、これだけ戦争は悲しかったのでしよう。

二つめはなんと鶴彬さんは石川啄木の大ファンだと聞いておどろいたことです。ほんとうに、びっくりして、しかも、師しようと同じくらい啄木さんを尊敬していたと知りました。今日の川柳教室で鶴彬さんのことをたくさん知ることができてよかったです。

## ●「盛岡にお墓」にびっくり

玉山小五年 日野杉瑠海

私も、宇部先生と同じで、鶴彬さんは、石川県出身なので、てっきり石川県にあるお寺かと思っていたらどこにもなかったのですが、一叩人という人がさがしたら、岩手県盛岡市にある、光照寺にお墓があると聞いてびっくりしました。啄木を兄のようにしていたとは知りませんでした。

石川県にすんでいる人が岩手県に関わっているなんてびっくりしました。

鶴彬さんの川柳は、少しこわいなと思いました。中身を教えてもらって、戦争の時代の人はかわいそうだと思います。戦争の時代



の人なので、鶴彬さんの川柳は少しだけ、伝わりました。その中で私は、「胎内の動きを知るころ骨がつき」は、まだ産まれない子は、お父さんを本当に目の前で見れることがないのは少しかわいそうだと思います。

●鶴彬はとても勇気のある人

玉山小五年 米澤 恵

私は、鶴彬という人を始めて知りました。「手と足をもいだ丸太にしてかへし」意味はぞつとするくらいおそろしかったです。このような詩をまとめたザツシを売ると、つまってしまうのに、売ったのでそれほどみんなに伝えたかったんだなあと思いました。とても勇気がある人だと思います。

私が一番びっくりしたことが一つあります。それは、鶴彬が石川啄木のファンだということ。川柳を教えてくれた先生よりもそんけいするほど石川啄木は、すごいんだなあと思いました。

子どもの心を育てる川柳教室

〔盛岡タイムス〕より転載)

第18回子どもの心を育てる川柳教室(いわて子ども川柳を育てる会主催)が12日、盛岡市愛宕町の市中央公民館で行われた。学校教育の現場に川柳を取り入れている教員らが参加。川柳を通じて各校の取り組みを紹介するとともに、成果などについて報告した。

五七五の短い言葉の中に、自らの感じたことを詠み込む川柳は、児童や地域の暮らし、親の様子などがかなりの部分で見えてくるという。現在、同会を通じて川柳に取り組む学



川柳教室を報じる「盛岡タイムス」

校は県内で約25校。自らがつくった川柳が学級報や新聞などで評価されることで、児童の前向きに取り組む姿勢にもつながっている。

田老第一小の高橋昌平教諭は、日常的に日記や文章に親しませるために百ます作文の取り組みを行っている。最後に日記の内容を川柳にまとめるが、「たぬきより 腹がぼんぼこお父さん」など、動物園に行った楽しみなどを児童は上手にまとめている。

自由に川柳を書かせた際には、自宅が全壊し仮設住宅から通う児童が震災後のまちを表現した川柳を書いた。「まちが何もなくなつたけれど、花が咲いたのを見て、それをキャッチして書ける子どもはすごいなあ」と感じたという。

城北小の佐藤多江子教諭は、学級を担当していた際には作った川柳は全て学級通信などで家庭にも知らせるようにした。家庭でも川柳を通し、児童の新たな面を確認したり、どんな川柳を作るか楽しみに待つ良い雰囲気になつていったという。「自分の作品が評価されることで、良い作品作りにつながるが、勉強で何点を取るといふのとは違う

励みになつている」と紹介した。

同会の宇部功会長は「一番は生徒指導上の問題、学級経営の視点で川柳を取り上げた。今、教育は大変な時代で、不登校やいじめ、体罰などさまざまな問題を抱えている現場に川柳という文化が手助けできれば」と話す。

〔盛岡タイムス〕2013・1・14付)

「子どもの心」五・七・五

平成24年度年間賞

宇部 功・選

- 目で合図きみとぼくとのゆうじようだ 千徳小四 佐藤 旭
- 半紙から元気の文字がはみでてる 寺田小五 深野 碧人
- 怒りたいそんな時でも笑顔だよ 金ヶ崎小六 宮本 翔
- 反抗期きらいじゃないのゆるしてね 生出小六 福田 萌華
- 家族はね心の中のホツカイロ 玉山小四 濱 勝瑛
- ゆつくりな自分らしさを好きになる 城北小六 谷口 紅音
- なつやすみどうぶつえんもおひるねだ 仙北小一 にただみか
- 十年後親とお酒を飲みたいな 山形小六 畑中 亘輝
- あったかいみんな集まるお正月 山根小三 山地 夢久
- 胎内の中で感じたあたたかさ 寺田小六 中村 莉沙

|                   |        |       |     |
|-------------------|--------|-------|-----|
| 万能薬それは私の母の愛       | 松園小六   | 安藤    | 映月  |
| 米をとぐパツクリ割れた母の指    | 松園小六   | 菊池    | 幸樹  |
| 米ばなれ日本の文化守りたい     | 城北小六   | 野澤    | 茉央  |
| ゆつくりとおこる先生こわいよう   | 田老第一小二 | 岩脇    | 彪志  |
| 急ぐほど宿題の山そびえたつ     | 寄木小五   | 浅尾    | 百那  |
| あったかいこたつのようなママがすき | 河北小三   | 榎本    | 七海  |
| 先生がやればできると背中おす    | 久喜小五   | 坂本    | 早紀  |
| いつまでも地方の医者はいそがしい  | 涌津小六   |       | 優   |
| ひまわりは顔がでっかいライオンだ  | 涌津小三   |       | 快人  |
| かけ声についつい食べるわんこそば  | 城北小六   | 泉田    | 陽菜  |
| 不器用な編目が語るあたたかさ    | 城北小六   | 嶋村光太郎 |     |
| 月火水 木金こらえて土日くる    | 緑が丘小五  | 中嶋    | みゆ  |
| 言いわけをぐっと飲みこみがまんする | 生出小六   | 岩崎    | 亜美  |
| 七変化ころころ変わる十五歳     | 飯岡中三   | 中沢    | 優   |
| 光から元気になる春の朝       | 飯岡中二   | 田村    | 綺菜  |
| 夏休みあとあと気づく無計画     | 下橋中一   | 丹     | 咲希子 |

|                    |                 |        |
|--------------------|-----------------|--------|
| 宇部 功著「子どものころ五七五」から | こまったな今日は大雪北の道   | 小野寺美世子 |
|                    | 北風がほおをさわってにげていく | 伊藤 未来  |
|                    | 温暖化北極さえもとけだした   | 加賀谷 遼  |
|                    | 北朝鮮戦争だけはやめてくれ   | 水沼 孝太  |
|                    | 温暖化北の氷が消えている    | 下芋坪慶介  |
|                    | 北の国春を待つてふきのとう   | 小林 千里  |
|                    | 春なのにまだ雪がある北の山   | 伊藤 優   |
|                    | 白鳥が北上川でおどっている   | 小笠原志穂  |
|                    | 寒いけど北の子どもは元気だよ  | 大坊安沙美  |
|                    | 北国の日課は朝の雪かきよ    | 奥山 結香  |
|                    | 北風が私の鼻を赤くする     | 大村佳緒里  |
|                    | 北まくら母にだめだと教えられ  | 泉山 由樹  |
|                    | 北の島いつになったらかえすのか | 未倉 嗣文  |
|                    | 降る雪が白い宝石北の国     | 桜田 玲奈  |
|                    | 北の核中身は冷めんセットかな  | 伊藤 未来  |
|                    | 寒い北車の行列続いている    | 滝川 和久  |
|                    | 南極にお金を貯めて行ってやる  | 鈴木 祐美  |
|                    | 南の島きれいな海で泳ぎたい   | 関 梓    |
|                    | 南風やさしい風が吹いてくる   | 久慈 未夏  |
|                    | 寒がりの私は南むきかもね    | 阿蘇 泉   |
|                    | 生きかえる南の島へ旅にでる   | 山口 実果  |
|                    | 南風吹いたら野球の準備する   | 伊藤 俊   |
|                    | 南風吹いてつくしが起きてくる  | 遠藤 幸子  |
|                    | 南から春がふんわりとんでくる  | 遠藤 唯菜  |
|                    | 桜たち南の風で咲いていく    | 小野寺 慧斗 |
|                    | 南から春一番がやってくる    | 菊地 侑樹  |
|                    | 南国の老人みんな元気だよ    | 庄司 侑椰  |
|                    | 南から桜前線やってくる     | 柳田 祐里  |

(学校名、学年は省略)

神山征二郎監督

### 映画「鶴彬 こころの軌跡」DVD好評発売中

- ◆発売元
- ◆申し込み先
- ◆郵便振替口座
- ◆加入者名
- ◆販売価格

鶴彬を顕彰する会  
 鶴彬を顕彰する会事務局 (左記参照)  
 00740-5-75480  
 鶴彬を顕彰する会  
 1本2,000円(税、送料込み)

池上リョマ  
 榎山 文枝  
 高橋 長英

### 「鶴彬の映画はこうして作られた」DVD好評発売中

生誕地での1カ月にわたる現地ロケの舞台裏を密着レポート。俳優さんの素顔は…  
 スタッフは…エキストラは…ロケの民家は…橋は…あの空き地は…?

◆販売価格 1本 1,000円(税、送料込み) ◆申し込み先 鶴彬を顕彰する会事務局(上記)

## 鶴彬論

連載 その4

秘めた思いと  
プロレタリアへの道

かほく市在住 秋月 愛里沙

第四章 鶴彬の秘めた思い  
仏教川柳を中心に

最後に仏教（釈迦）・朝鮮人を題材に扱った作品について触れておく。第一章から、川柳・評論・詩作品を通して、プロレタリア川柳に行き着くまで、文学としてのプロレタリア川柳と答えを見出すまでを追ってきた。この章では、朝鮮人や仏教を扱った作品から、鶴彬の思い、目指した世界を考える。

## 第一節 仏教川柳

鶴彬の作品には、大阪に出た頃（17歳頃）から生涯を通して釈迦や仏像などの仏教に関する作品や、神を扱った次のような作品が見られる。

- ⑭ 仏像を掴んでみると軽かった  
 ⑮ 神様よ今日の御飯が足りませぬ  
 ⑯ あな尊うと聖書売れば明日のパン  
 ⑰ 仏像に供米が絶える小作争議  
 ⑱ 凶作を救えぬ仏を売り残している  
 右の川柳作品には、「仏像」「神様」「仏」「聖書」と宗教を表す言葉が入っている。⑮「神様よ今日の御飯が足りませぬ」（大15・12、『影像』34号、p80）⑯「あな尊うと聖

書売れば明日のパン」（昭2・5、『影像』更生1号、p107）⑰「仏像に供米が絶える小作争議」（昭3・12、『川柳人』194号、p161）はいずれも、神に御飯が足りないかと嘆く姿、聖書売ってまでパンを手に入れようとすると、姿、仏像に供米が出来なくなるほどの小作争議の様子を描いており、貧困する様子が読み取れる。その貧困の末には⑱「凶作を救えぬ仏を売り残している」（昭10・2、『川柳人』268号、p269）のように仏と言えども、この状況を救ってはくれないと仏を見放す様子や、さらには⑭「仏像を掴んでみると軽かった」（大14・4、『北國新聞』、「北國柳壇」、p31）のように仏そのものを皮肉っている作品もある。

川柳の手ほどきを受けた岡田太一（澄水）や盟友の古林徳次など当時の鶴彬を知る人によれば、

東京に出るまでに、仏教に熱心な養父の影響を受けて、近くの浄専寺へ毎晩のように出かけ、住職の平野健三さんと仏教論法をかわし、また宗教家の暁鳥敏に師事した

と伝えられている（平20、「高松歴史新聞」、ふる里タンク高松会）。このことから、近所の浄専寺へ出入りし、熱心に仏教説話を聞いて作った句が、仏や神を皮肉り、さらには仏教のみならずキリスト教まで、宗教界を否定する句であった。聞いていた話全てを否定するような作品を家に帰ってから作っていたのだ。凶作や貧困、失業者が溢れかえる現実社会にも関わらず、宗教は我慢や道徳を説き続ける。実際にはなんの力にもならず、教えを守っていても御飯も食べられない。仏法はきれいごとであり、現実世界とかけ離れ、何

の役にもたたない宗教を鶴彬は批判したので。

仏法と現実の相違は誰もが抱く疑問である。養父が熱心な仏教徒であり、少なからず影響を受け、神や仏を信じていた時期もあったかもしれないが、実際、過酷な労働・貧困・失業を経験し、神も仏もあったものじやないと悟ったのだろうか、神にすがる作品ではなく、神や仏を皮肉り、宗教界をも批判する作品を多く残している。このことから読み取れることは、宗教によって誤った思想を普及するのではなく、現実を見据え、何をすべきか、状況を打破するのは自分自身であるとの思いからの宗教批判ではないか。鶴彬の立場から言うと、川柳を大衆化し、現実を描き続けたことから、現実を見据え、貧困や失業などは宗教では打破できない、打ち破るのは自分自身であり、今こそ社会に立ち向かうべきであるとの強い思いがあると考ええる。

作品はどうであれ、宗教を否定していても、仏教の影響を受けていたのは明確である。鶴彬という柳名も、仏教用語からきたものではないかと考えられる。深井氏を始め、多くの人は、東京に出て、井上劍花坊・信子宅を訪れた時、劍花坊の娘、鶴子に密かな想いを抱き、鶴という字を入れて、「鶴彬」と名乗ったと述べているが、断定はしていない。仏教用語で「鶴林（かくりん）」という言葉がある。この言葉は、釈迦の涅槃（入滅）のときに、周囲の沙羅双樹の木々が、真っ白に変化した様子を指す言葉である。そもそも、涅槃には、迷いや煩惱、執着を断ち切り、いつさいの苦・束縛・輪廻から解放された最高の境地という意味がある。最高の境地とは、最上の安楽とも言い換えることがで



き、そこから「永遠の平和」・「完全な平和」・「絶対の安らぎ」とも訳すこともできる(注7)。鶴彬と名乗った時には、すでに彼なりの悟りがあり、苦しみや束縛からの解放を願い、戦争へ向け、激動する時代に永遠の平和を願って「鶴林」にさんづくりを付加し、「鶴彬」と名乗ったのではないか。鶴子に密かな想いを抱いていたからという理由は、なんともロマンチックで興味深い。彼の目指した世界や川柳に対する想いを見ると、「鶴林」という仏教用語からとった柳名と考える方が適切といえよう。

## 第二節 朝鮮労働者に対する思い

次に朝鮮人を扱った作品に触れておく。周知の通り、鶴彬の川柳作品の多くはプロレタリア川柳であり、川柳を通して社会を批判し、風刺している。その作品の中には、朝鮮人を扱ったものがある。川村湊「鶴彬とプロレタリア川柳」(前出)は、鶴彬の朝鮮人への思いが、当時の人々とは違っていることを次の連作から読み取り論じている。

半島の生まれ

半島の生まれでつぶし値の生き埋めとなる

内地人に負けてはならぬ汗で半定歩のト

ロ押す

半定歩だけ働けばなまけるなどやされる

ヨボと辱められて怒りこみ上げる朝鮮語

となる

鉄板背負ふ若い人間起重機で曲る背骨  
母国掠め盗った国の歴史を復習する大声  
行きどころのない冬を追っばらわれる鮮

人小屋の群れ

(昭11・12、『火華』12月号、p351)

右の連作「半島」とは朝鮮半島のことであり、「鮮人」「ヨボ」とは朝鮮人のことである。「ヨボ」は日本人が朝鮮人を呼んだ隠語的な蔑称であり、「チョン」とも呼ばれていた。また「内地人」とは「半島(人)」に對比される言葉であり、日本人を指す。「半定歩」というのは、朝鮮人の労働賃金が日本人の半分であったことをいう言葉である。この詩が発表された昭和十一年は、大日本帝国が大韓帝国を併合し、「内鮮一体」というスローガンが叫ばれた時代である。川村氏の言葉借りれば、「国際的な連帯という美しいスローガンより、今日の飯を得るための仕事につくことが重大」であり、朝鮮半島の植民地化により、日本にきた朝鮮労働者や移民に対して、非常に冷酷であり、明らかな民族差別があった。そういう背景からか、朝鮮人を扱った作品には、朝鮮人を軽蔑や侮蔑、嘲笑する作品が多い。鶴彬の作品を見てみると、朝鮮人に対して、軽蔑や嘲笑するものではなく、どちらかというといふ異郷の地で過酷な労働を強いられる人への同情や共感に近いものがある。朝鮮植民地時代、表向きは民族差別はしていないと日本は主張し続けていたが、この詩からも分かるように、現実では少ない賃金で、過酷な労働を強いられる朝鮮人がいた。完全に植民地化し、支配しようとするあまり、見えていなかったもの、偽装され、隠されていた事実を鶴彬は作品にして

宗教を否定し、朝鮮人労働者に対する思いを描いた作品のどれを見ても、真実をリアル

に描き、社会を批判し、このような社会にした国をも風刺する作品がほとんどである。日本が戦争という泥沼の深みにはまり、状況が悪化し続けるが、権力により押さえつけられ誰もが口を閉ざす中、鶴彬は川柳という武器を使って抵抗し、闘い続けた。鶴彬の作品は国そのものを批判していると捉えることが出来るが、それだけではないだろう。特高に何度も捕まり、兵役中では重営倉や大阪衛戍監獄に送り込まれてもお転向はせずに、プロレタリア川柳を貫き通した。闘い続けたという見方も出来るが、一方で、リアルに現実を描くことによつて、戦争や植民地化のことばかりに尽力し、国が見えていなかった部分(現実)を鶴彬は描いている。このことから、間違つた方向へ進む国に対して、警鐘を鳴らし続けていたとの見方が出来るだろう。そして、誰よりも平和を願い、国が正しい道へ進むことを願って闘い続けたのである。

## 結論

以上のように、鶴彬は、幼少時代に表に出せなかった率直な気持ち、川柳を使って表現するようになり、虚無主義や生命主義を乗り越え、自身の労働体験や貧困生活を経てプロレタリア川柳に到達した。プロレタリア川柳では、

・ 厳粛な現実批判の風刺短詩である

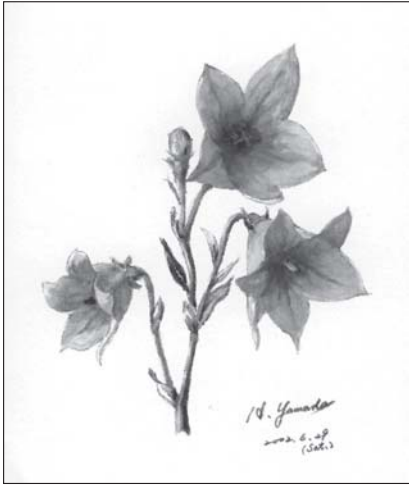
・ 風刺性は、わずか一呼吸の短い時間に

『うた』を完了せねばならないという制

約のために、もつとも短く鋭い、寸鉄殺

人的風刺である。

・ 何よりも印象的な簡潔さと発條の如き圧搾的弾力をはらむ手榴弾の詩



絵・山田 裕一

・ 勤労大衆の胸に、おぼえられ易い言葉と音律をもって飛び込んで行く寸劇詩と鶴彬自身が「川柳における風刺性の問題」(前出)に述べ、「川柳は一つの武器である」と文学上における川柳の最終的な答えを見出した。虚無主義・生命主義に心酔していた頃は、新興川柳とはどうあるべきかを中心に論じ、発表していたが、大阪に出てからは、新興川柳の為に川柳を作るのではなく、川柳は無産階級の唄であり、一つの武器でなければならぬと主張し、知識人でなくとも理解できるような簡単な言葉で評論を書き、労働者の唄をさらに広めようと、大衆化に尽力した。新興川柳以前の川柳は、滑稽で娯楽的な川柳であり、狂句と呼ばれており、鶴彬は川柳は詩であるという見方から、文学上での川柳の位置を高めようとしていた。検挙される原因となった晩年の句「手と足をもいだ丸太にしてかえし」「万歳とあげて行った手を大陸へおいて来た」「胎内の動き知るころ骨がつき」を見ると、単なるブラックユーモアとは言えず、検挙しなければならなかったほどの作品であるといえる。赤化事件の時点で川

柳が文学上で高い位置にあれば、喜多一二〇鶴彬と一致していた可能性があり、二十九歳まで生きることが出来なかった可能性がある。晩年の句は、見逃すことの出来なかった作品であったと考えることができる。したがって、大衆化に尽力したこともあり、より多くの人に認知され、川柳がある一定の位置まで高められたことよって、検挙されるまでに至ったといえよう。

「空白の時間」と言われている金沢第七連隊所属中の赤化事件では、判決文より、隊内に共産主義を普及し、反軍思想を主張していたこと、君主制の廃止や、私有財産制の撤廃を求め、権力に立ち向かっていた様子を明らかにした。また、仏教川柳や朝鮮川柳に触れる労働者たちの現状や悲惨さを国民に訴え、社会や国を批判した。鶴彬は、反戦川柳作家と評されるが、反戦の意志はあっても、反戦の句作品は多くない。女工など底辺に生きる人々や、朝鮮人労働者のような虐げられた人々、また、労働者などの弱者への共感の句が多く、そういった弱者を生み出す社会の仕組みや国そのものへの怒りの句が多い。戦争や植民地化に尽力するあまり、国が見えていない部分をも描き出し、国に対して警鐘を鳴らし続けていたとの見方もできる。鶴彬と名乗って初めて発表した「海こえて世界の仲間手をつなぎ」「血を流す歴史のあした晴れ渡る」のように、誰よりも平和を願い、弱者の立場から権力に対し闘い続け、間違った方向へ進む国に対して警鐘を鳴らし続けていた。何度も検挙されながらも頑として転向しなかった、その揺るがない精神力や強い平和を願う思いを評価するべきである。

はじめに述べたように、鶴彬は今やつと注目されつつある。当時、特高にマークされていた鶴彬と関係を持つ者や、書簡を所持しているだけでも連行されることがあった。世間の風当たりも冷たく、ほとんどの者が関係を断つたため、現存している資料が少ない。書簡などの資料を持つている方がいても、公開を頑なに拒んでいると聞く。当時の風当たりや危険度を考えると、絶縁届けを提出する親族もいる中、どのような思いで保管し続けているのか計り知れない。いつか公開されることを望みつつ、全集未収録の資料が発見されること、また、鶴彬が多くの人に注目され、評価されることを願う。

(注7)「鶴林」の意味は、『広辞苑』第六版、岩波書店による

付記 川柳・詩・評論作品の引用は全て、澤地久枝編『増補改訂復刻版：鶴彬全集』(平10・9、自費出版、所収)による。Pは同書のページを示す。

|| 完 ||

### ◇投稿歓迎

【次回締切6月末日】

- 鶴彬への思い
- 作品鑑賞
- 鶴彬やその仲間たちのエピソード、情報
- 「あの時代」について思うこと
- 「はばたき」1〜12号の感想、批評
- その他、鶴彬に関すること

鶴彬の句に学ぶ ⑥

金沢市在住 岩原茂明

はばたき11号掲載のように、鶴彬顕彰会にアメリカのマイニア先生・高橋裕子さんたちからの質問の矢がありました。それをもとに考えてみました。

1 弾丸の来ぬところで□□の詩ができた

鶴彬

最初、私は「革命」が入ると考えました。伏字の常道だからです。しかし疑問もありました。「革命」ということは概念的で川柳にはなじまないと思えたのです。

顕彰会では議論の結果、「弾丸が来ぬところ」は故郷だという意見が多数でした。それで考えました。

当時の価値観で大阪や東京というのは、多くの地方人にとっては敵の多い一時の仮住まいです。そこを「弾丸の来ぬところ」と比喩したのでしよう。「革命」の対象も故郷の幼馴染の境遇を案じてのはずです。名前を公表することをはばかったのかもしれませんが、ならば□□というのは通常の伏字ではなくて、文字にできない感情を記号化したものではないか、と思に至りました。

原発のないところで○○の身を案じ

茂明

2 大砲はピアノに化け込んで出る製鋼の門

鶴彬

大砲、カノン砲はピアノ線と同じ鋼線を巻いて作ります。切断してピアノに取り付けられ

ばピアノの部品です。

神戸製鋼ではそのまま巻いて工場出荷したのでしよう。外箱にはきつと「ピアノ線」と書かれていたに違いありません。

鶴彬が街頭でその光景を見ていて、掴んだ句なのでしようか。

日常生活のあらゆる物資が軍需化されていることへの批判の趣がみてとれます。

ちなみに、今の自衛隊は装備は立派でも弾薬は二週間分しか備蓄していないといまます。

国防論のまやかしを示すものではないでしようか。

大砲をピアノで造り弾はなし

茂明

3 人絹工場め飢饉につけ込んで血ぶくれに

来た

鶴彬

人絹は短繊維で、わたぼがひどいところ

です。そこで働いていた女工の多くが肺病にかかりました。当然血を吐きます。

昭和四年以降は健康診断が義務づけられたはずですが、おそらく当該女工は解雇され、代わりの人手を人絹工場の資本家や手代が飢饉に付け込んで募集していたのでしよう。

そのことを「血ぶくれ」と表現したものではないでしようか。

今の日本では、デフレ経済を口実にした、ピンハネが横行していないでしようか。

ハケン切り血潮をすする経営者

茂明

4 うたたねは弁証法を屋根に葺き

鶴彬

瓦屋根は田舎にはありませんから、つまりは東京かどこか都会でうたたねしながらアイデアをねったということでしょう。

頭に弁証法の本を被って。

こういう情景は人によって、私ならここで、というところがあるはずですよ。

いい案が寝転んで出る六畳間

茂明

5 血を吸うたままのベルトで安全デー

鶴彬

当時日本はILOの常任理事国でした。そのために労働の諸条約も率先して批准することを求められていました。

たとえば工場危害予防衛生規則は昭和四年に制定されています。

しかし「わが亡きあとに大洪水は来たれ」という精神の資本家たちは、そのための投資を怠りました。

駆動ベルトで原動機と加工機械を結んで鍛造品を加工している工場でも形だけの安全デーが設けられたのでしよう。ケガ人を出した真紅の痕跡を残したままで。

やられてるフクシマ遠く安全いい

茂明

6 泥棒を選べと推薦状が来る

鶴彬

ILO条約批准の一環で、昭和十一年には「退職積立金及退職手当法」が制定されています。

これは今日では厚生年金保険ですが、労働者側の代表が必要だと思えます。

積立方法が、厚生年金保険と同じだとすれば、雇用者と労働者は資金を折半で出して、積み立てていったのでしよう。ならば、手取りが減る労働者からは泥棒に見えたのに違いありません。

したがって、労働者の代表を選ぶといても極めて悪法の代表で、なり手のないものでした。制定の本当のねらいも軍事費のねん出



で、集まったお金は軍費調達に回されてしまった。

こういう出自の年金は戦後も無駄遣いの代表「厚生年金会館」をはじめ、土建屋の禿鷹どもの食い物にされました。

年金はハゲタカのため立ち枯れし

茂明

7 もう綿くずを吸えない肺でクビになる

鶴彬

ストレプトマイシンが日本に入ってきたのは戦後のことで、この当時は肺病は不治の病でした。

健康診断で肺病とわかると解雇され、親元に送り返されます。

親元でも家の外の物置のようなところに、ひとり寝起きしていたことでしょう。

当時はこのような労働者が救済を申し立てる公益委員会もなく、裁判所は精神的にも物理的には非常に遠いところでした。現代の公害事件と似ています。

アスベスト退職してから発覚し

茂明

8 ききうまでとかした毒泥あびせかけられ

鶴彬

訓読みで「どろ」としたほうが「あびせかけられ」へのつながりがいいですね。母音調和の原則は大切にすべきです。つなぎの例としては「あおいのうえ」があります。語呂がいいでしょう。「あ」は「あ」または「お」とつながります。「お」は「お」と多くつながります。「どろ」は語呂がいいのです。

公害の悲惨さをうたった句のひとつだと聞いています。

安全なはずの原発で毒を浴び

茂明

## 鶴彬川柳をアメリカで紹介

マサチューセッツ州立大学教授

本誌の前号で取り上げたアメリカ・マサチューセッツ州立大学のマイナー教授による、鶴彬を紹介した英文の一部が送られてきました。石川県津幡町在住のチエルシー・ロビンソンさんに、日本語に訳していただきました。鶴彬というプロレタリア文学や川柳、俳句など日本独特の短詩型文学が、外国ではどのように理解されているのか、興味あるところです。

鶴彬（本名は喜多一二、1909～1938年）は、おそらく日本のもっとも優れたプロレタリア詩人でした。日本海側に位置する石川県にあるふるさとでは、2009年に彼の生誕百年記念のお祝いをします。よく知られているプロレタリア作家、小林多喜二（1903～1933）と同じく、29歳の若さでなくなりました。小林は警察の拷問で亡くなり、鶴は刑務所の病院で赤痢で死亡しました。

鶴は川柳という、一般的に5・7・5の音で作られている日本の風刺的な詩を何百編も書きました。しかし、左に上げた詩の中で、簡単に5・7・5のパターンに当てはまるものは「蟻食ひ」の一編だけで、特に「しゃもの国奇譚」が異なり、どちらかといえば短歌の5・7・5・7・7に近いです。鶴の詩は辛辣、痛切で観念的です。彼の作品から歴史に残るものがあるとすれば、それはいくつ

の反戦川柳でしょう。例として、次の二つの詩は死の直前に書かれたものです。

手と足をもいだ丸太にしてかへし

当時は「四肢マヒ」という言葉が日本語にいても英語にいても存在していませんでしたが、どちらにしてもあまり詩的なことばではありません。鶴はここで代わりに、両手両足をなくした兵士を、枝を切られて工場に連れていかれるために準備してある木の幹に例えています。

胎内の動きを知るころ骨がつき

兵士である主人の遺灰は戦場から届けられ

ました。私が翻訳した41行は、6から7行に及ぶ5編の詩となり、すべて1936年から1937年の間に書かれたものです。これらの詩は孔雀、アrikイ、ガチョウ、しゃも、蜂など、鳥や獣を寓意として利用されています。孔雀とアrikイは蟻の欲深い搾取者であり、人間がガチョウと蜂を搾取し、そしてしゃもが飼い主に従って命がけの戦いに行かれます。比喩は間接的で、気を抜いた読者なら全く気がつかないかもしれません。しかし、検閲にかかわらず、比喩をなくした同じテーマでの詩やいくつかの川柳も書きました。川柳は、同じく17音で作られた俳句によく似ています。俳句と同じく、川柳には脚韻や韻律は使われていません。日本の短い詩ではよく見られる形で、これらの詩は切れ目がなく、一行のテキストになっています。（しかし、鶴の川柳には3行になっているものもいくつかあります。）読者が読みながら区切りを入れます。「しゃもの国奇譚」の一編は、17音の川柳より31音の短歌に近いため、5行に分けて翻訳しました。

連載

## 新興川柳の軌跡

松原 秀河

〔ばんば〕昭和60年9月号より転載)

## (十八)

## 鶴彬と平林たい子

―留置場で弁当を奢って貰った鶴彬―

鶴彬の最後の作品として一般の人が思っているのは、昭和12年11月15日発行の「川柳人」特別欄に掲載された左の5句である。(※註)

高粱の実りへ戦車と靴の鉾

屍のいないニュース映画で勇ましい

出征の門標があつてがらんだりの小店

手と足をもいだ丸太にしてかへし

胎内の動きを知るころ骨がつき

だが本当は留置場で書いたものを、同じ署内に留置されていた橋浦時雄という人が秘かに外部へ持ち出した左の二句であった。

泥棒と抱き合つて寝る寒さかな

血を吐いた同志の跡にすわらされ

この橋浦時雄は、平林たい子の夫で社会主義者小堀甚二の古い先輩である。橋浦の書棚の日記の中に天皇のことを「竜顔というが、なるほど竜に似た顔をしている」と書いたの

を特高に見つけられ、この一行だけで五年という重い懲役に処せられた人である。

鶴の作品を物資の豊富な、人権尊重、言論は自由という平和に恵まれた現代社会に生活している我々が単純に「川柳」としてのみ評価するのは妥当でないと思う。

何故なら、いま私達が、いくら働いても働いても食えない世の中、心の中にある真実を口に出したり活字にすれば、直ちに獄舎にぶち込まれる、こんな暴政下に苦しんでいる時に今のような川柳を書いていられるだろうか。当時の軍政下に歌壇、俳壇、柳壇は廃刊、検挙により沈黙してしまつた。この時、ただ一人、死を決意し川柳を武器として権力へ抵抗した勇氣のある川柳人が我々の先輩にいたのだ――と、心の底に刻み込んで置くだけでよい。私は、そう思う。

小説家、平林たい子は自伝「砂漠の花」第二部「警察にて」の中で拘留中の鶴に触れている。

「もう一人、鶴さん（原文はT氏と書いてある）といつて新興川柳派の若い人がいた。

鶴さんは川柳中興の祖といわれる井上剣花坊氏に師事して、同氏が亡くなつてからも、夫人信子を助けて雑誌を出していた。鶴さんがここに入れられる動機となつたのはその雑誌の中に「万歳と挙げた手を大陸に置いて来た」という反戦川柳を載せた事からだ。私は

外にいた時から両氏（鶴と橋浦）ともよく知つていたので、話相手には事欠かなかつた。

鶴さんのその川柳を特高室で初めて見せられた時には、思わず自分の憂鬱を吹きとばして

大笑いした。この人心逼迫の戦時にそんな大胆な川柳を堂々と雑誌に載せる人間がいたとは、およそ珍しくのんびりした事であつた。

橋浦氏の夫人は私の親しい友だちだったが、毎日上等な弁当をつくつて夫に差入れに来る。彼女の足音が聞こえると、夫婦とも留置場ぐらしをしている自分の情けない思いが、ひしひしと胸に迫ってくる。ところが鶴さんは年も若く親兄弟や友人たちからの差入れも途絶えていた。特高室に出ると、黙つてわれわれの言う事を聞いている橋浦氏のそばで私は鶴さんと芸術上の議論をたかかわして、憂さばらしをした。15銭ぐらいの弁当を取つて自分もたべ、ときには鶴さんにもふるまつた。金にも着る物にも事欠いて、いつも汚れた風をしている鶴さんの姿は、さながら中野署にいる自分の夫の姿だつた。(中略)

若い鶴さんも私も特高係に受けのよい従順な留置人ではない。私たちは、小さな事でよく反抗しては何日も留置場に置きっぱなしにされた。」

平林たい子の文は、留置場の鶴彬の片隅にふれたに過ぎない。彼の検挙後、川柳関係者は殆ど彼に関心を示さなかつたようだが、彼は孤独の中で、また官憲の過酷な扱いの中で、川柳は一つの武器である、という持論を忠実に実践して、留置場の中で右の二句を残したのである。(つづく)

(※編集者註 鶴彬最後の作品として「川柳人」に掲載されているのは表記の5句と「万歳とあげて行った手を大陸へおいて来た」の6句―一叩人編「鶴彬全集」)

**鶴 彬 文 献**

&lt;かほく市中央図書館所蔵&gt;⑤

- ☆ 「蕾よ、暁を抱け 鶴彬の生涯」 島 正富著  
1988 (昭和63) 年 7月 8日 発行 北国出版社  
(寄贈：杉本晴介 平成12・8・17)
- ☆ 「反戦川柳人・鶴彬 作品と時代」 一叩人 編著 たいまつ社  
1978年10. 15発行  
(寄贈：杉本晴介 平成12・8・17)
- ☆ 「少年倶楽部のなぞ」 吉橋通夫著  
1991年 8月 発行 汐文社
- ☆ 「川柳人 鬼才 鶴彬の生涯」 岡田一杜・山田文子著  
1997 (平9) 8・15発行 日本機関紙出版センター
- ☆ 「君は反戦詩を知ってるか」 井之川 巨著  
1999年 6月 7日 発行 皓星社  
(寄贈：城戸寿子 平成11・8・28)
- ☆ 「反戦川柳作家 鶴彬」 深井一郎著  
1998 (平10) 9・14発行 日本機関紙出版センター
- ☆ 「鶴彬句集」 岡田一と 編  
1987・6・7 発行 和川柳社
- ☆ 「昭和・遠い日近いひと」 澤地久枝  
1997年 5月10日 発行 文芸春秋社
- ☆ 「鶴彬全集」 一叩人 編 (写真㊸)  
1977・9・14発行  
たいまつ社  
(寄贈：杉本晴介 平成12・8・17)
- ☆ 「鶴彬全集」 一叩人 編 (写真㊹)  
1998年版 (増補改訂版)  
(3冊寄贈：葛葉重次 平成10・9)

**会員募集**

年会費：1,000円 (団体3,000円)

「鶴彬通信 はばたき」 購読料1,000円/年

■発行 鶴彬を顕彰する会

■事務局 〒929・1215 石川県かほく市高松 キ5 (小山 広助 気付)

■TEL・FAX 076-281-1201 ■E-mail: turuakira@yahoo.co.jp

■ホームページ <http://tsuruakira.jp/>